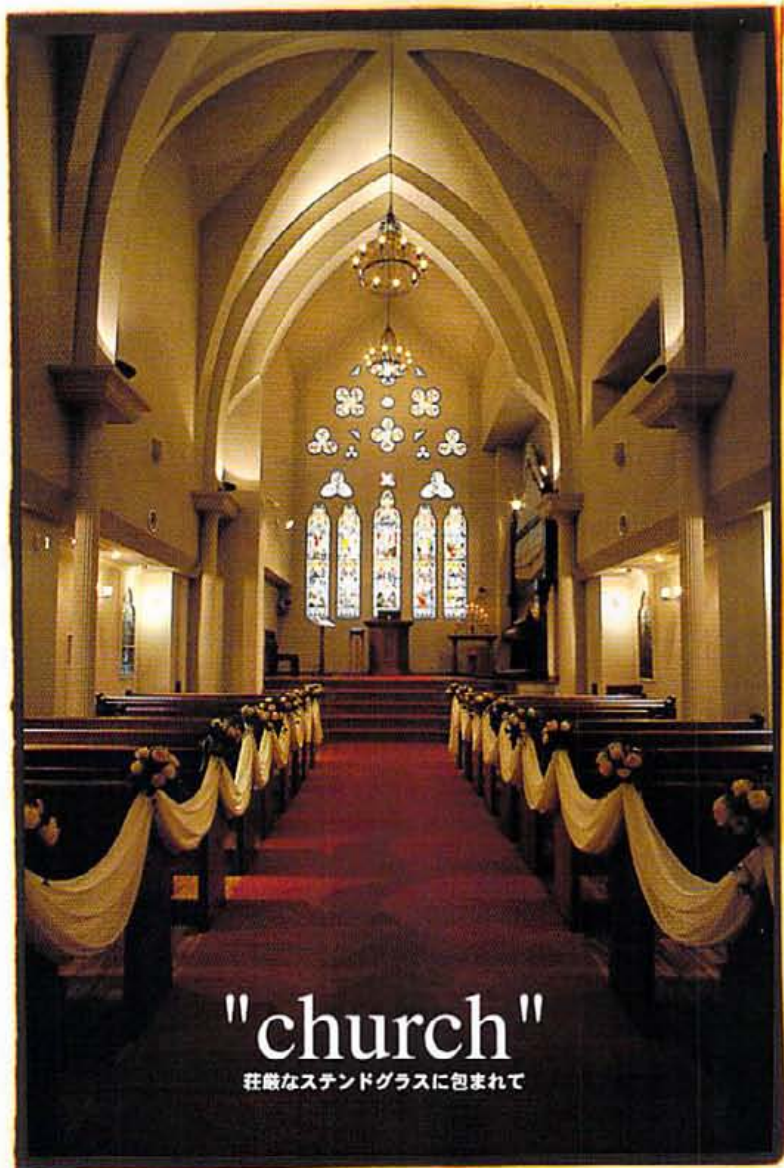


"appearance"

ひときわ目を引くレンガ造り

**KYOTO
Technical
Site**

取材・文/大和まこ (本誌) 撮影/高橋章夫



"church"

荘厳なステンドグラスに包まれて

荘厳だけでない、そんなチャペル

'02年春、御幸町三条にウェディング・チャペルが誕生した。

明るいレンガ造りのその建物は、新旧が交差する街にあって、人々の目を惹き付ける。

スペースの性質上、誰もが気軽に入れないゆえに、興味も増す。そのチャーチの全貌がここに。

歴史を持つ街だからこそ、
京都に再生された理由

イングラッド北部に位置するシェフィールド地方。産業革命以来の工業都市であり、刃物と銀メッキした銅製品で広く知られる。けれども全世界に押し寄せる脱工業化の波は、この地として例外ではない。数年前に公開された、失業した男性が家族を養うために男性ストリップを企画するという映画「フルモンティ」の舞台でもあるように、少し衰退しつつある街でもある。結果、人口は減少し、街の要である教会が消えゆくことも免れない。そんな中のひとつが、セントアンドリュース教会だった。

産業革命とはほぼ同時代、18世紀に建立された「キリストの降誕から最後の晩餐までの物語を10枚のステンドグラスに綴りあげ、それが欠けることなく現代まで継承され、重厚な美を持つ教会。技術が稚拙で洗練されていなかったゆえに、ほつてりと厚みを持ち、細かな気泡が入ったガラスで作られた、18世紀のステンドグラスは、現在の技術を持ってしても逆に真似できない、最も美しいものだと言われる。やわらかな光にはあまりにも惜しく、歴史をたっぷり含んでいた。「せめてステンドグラスだけでも、扉だけでも、再構築はできないものか」——関係者はそう願う。複製は出来ても、時の重みは再生できない。その切なる願いにも近い思いを受け止めたのは、遠か離れた極東の地、日本は京都だった。「歴史を持つ建築物も数多く残されている、いにしえの都・京都。ならば、和と洋の違いはあっても、この地に溶け込むのではないか」。受け止める側の結論はそう出た。歴史を持つものが、歴史の街のページを作り始める。双方に異論はなかった。かくして、10枚のステンドグラスを含む、すべてのステンドグラスは細心の注意を持って選ばれた。数え切れないほどの人々を迎え込んだ木製のアーチ型扉、喜びも悲しみも共有したであろうチャーチ・チェア、荘厳な音色を響かせるパイオルガン、多くの人々に教えを伝えた説教台。すべては、シェフィールドの地にあった時のまま、再生された。

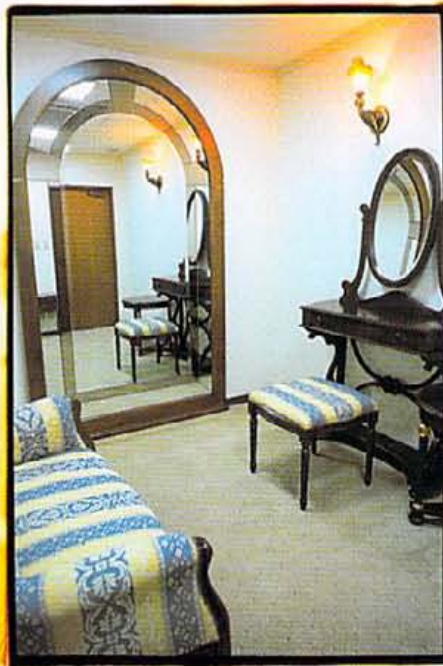
ウェディング・チャーチとして、
そこに加えられた想い。

京都・御幸町三条。古き町並みに新鮮な店々が次々



"banquet"

70名までの披露宴はカジュアルに



"dressing"

花嫁になる瞬間を迎える部屋



"waiting room"

ゲストを迎える明るい陽射し

と出店する、京都で最も活性化している街、京都セントアンドリュース教会はその地に建つ。和と洋の遭遇は、新と旧のコラボレーションの地を選んだ。後づけではあるが、「御幸町」という名も二人を祝福する気持ちを表しているようで嬉しく思います」とスタッフは微笑む。

ウェディング・チャーチとして新しい息を吹きこまれた教会。いにしへのしつらえに加えられたのは、きめ細やかな心遣いと、そのための最新の設備。「最近ではカジュアルであったり華やかであったり様々ではありますが、パーティを重視される方も多いようです。けれどやはり「精進式」というのはお二人にとって、ご家族にとって、大切なものだと思います。そんな晴れの日を迎えるお二人を最大限にお祝いさせていただき、そしてお二人に替わってお招きしたゲストをもてなさせていただく、それが私達の思いです」。

その思いは形になり、随所に現れる。「お身体が不自由だから、車椅子に乗っておられるから、という理由で式や披露宴に参加できないのは、新郎新婦にとってもその方にとっても、どちらでも納得のいくものではないはず」と、全館バリアフリーにした。エントランスにはスロープが設けられ、エレベーターでの館内移動も可能、チャペルへも車椅子のまま入ることができる。実際、バリアフリーが、この教会での挙式を決めた理由のひとつになることもあるという。「フラワーシャワーが憧れ」と思う多くの新郎新婦のため、雨天でも行えるようエントランスにはポーチを設けた。地下のパンケットルームでの披露宴は、1日2組に限ることで、オリジナリティを高め細やかな心配りを実現させた。此細なこともかもしれない。けれどその積み重ねこそが、掛け替えのない一日を最良のものとするための、欠かせない要素である。

両当事者も欠かさない。心から祝うスタッフ達

「この教会が完成する前、私達スタッフの話聞いてとても気に入って下さって、完成を待って挙式をされた方が沢山いらっしゃいますね。とっておきの一日のための場所を、私達を信頼して決めて下さったことに感動もしましたし、挙式の時にも熱い思いが込められてきましたね」とあるスタッフは言う。「祝福」という言葉に、言葉以上の思いが託される。にこやかに出迎え、手を握り、祝う。それは「仕事」を越え、心から発せられた笑顔や言動。スタッフのそんな姿勢は、祝われる二人にも招かれるゲストにも、必ず伝わる。そして、何ものにも負けない強さ、魅力となるはずだ。

■京都セントアンドリュース教会
京都市中京区三条通御幸町下町 TEL.075-241-1118
<http://www.st-andrews.jp>

ステンドグラスを巡る10の物語

チャペル正面に並ぶのは、10枚が欠けることなく揃ったステンドグラス。ひとつひとつには物語が込められており、左上より順にこういった意味を持っている。

「降誕」羊飼いの元に天使が現れて、イエスの降誕を告げた。
「キリストの洗礼」イエスが洗礼を受けると天が開き、聖霊が白鳥のように飛び立ち、祝福する天の音が聞こえた。
「磔刑（たっけい）」罪人の処刑の際、けがれを地上から離す意味で行われた。
「復活」イエス最大の奇跡、処刑から3日目に、イエスは石像のふたを開けた。
「昇天」11人の弟子達とオリブ山にいたイエスは、彼らを祝福しながら天に昇った。
「幼児の祝福」子供を抱きかかえて、「神の国はこのような者たちのものである」と教えた。
「キリストの宣言」3人の弟子達を連れて山に登ると、突然その姿は白く輝き、神の栄光を示した。
「最後の晩餐」身の危険が迫ったことを知ったイエスは弟子達と最後の晩餐をした。
「不信のトマス」信仰とは、互恵や苦しむを見たから信じるというのではなく、見えぬものを信じることにこそ重要性があるとされる。
「神の授与」ペテロに天国への鍵という形で、地上の教会の役割を委託した。

